

卷之一

《秦の哀公は会を設け覇を謀る》

秦の哀公は楚の会盟から無事帰って群臣に諮った。

「わが秦は穆公が覇業をうちたてて数十年というもの諸侯はわが国に従っていたものだ。なのに穆公がお亡くなりになってからというもの、覇業も衰え、いままでは楚が天下を呑もうとの氣勢を上げている。悔しいかぎりではないか。わが秦は潼関より西を支配し、百万の勇敢な兵もある。これだけの国力がありながら晋や楚に追従することはない。だれかワシのこの思いを遂げさせるような策を持った者はいないか。天下に覇を唱え、中国の盟主となった暁には官職を加え、重い恩賞を与えよう」

哀公の言葉が終わらないうちに左の列から一人が進み出て声を上げた。

「あります」

それは哀公の叔父、公孫后である。

「おお、叔父貴か。その策を聞こうぞ」

「いまや晋の平公は色に迷い、政道を忘れて天下の信を失った。また、楚は先の会盟が成功せず天下の笑いものとなった。このような好機がまたとあるうか。大王、すぐさま会盟を設け、天下の諸侯を潼関のうちに入れ、同時に兵を伏せて潼関を閉じるのです。秦に従う者は国に帰し、従わない者は斬つて棄てればよい。こうすれば覇業はわが国のものとなりましょう」

哀公は喜んだ。

「それはよい。すぐに諸侯に会盟の開催を通知せよ」

「いましばらく……。すべての行動には大義というものがが必要です。そうしないとうまくいかないものです。昔、斉の桓公や晋の文公はなにごとにも天子の命令たる形式をとりました。それゆえに覇業を為すことができたといえましょう。このたびの会盟も天子に奏聞し、宣旨を受けてから諸侯に号令を下すべきです」

「しかしながら、このたびの会盟は秦が覇業を為すためだけのものであり朝廷の大義はない。宣旨などもらえるものだろうか」

「周室は権威を失い、あつてなきがごとくです。五霸の時代から周室への朝貢は少なくなるばかり、今やまったく等しい状態。今回の会盟を『鬪宝の会』と名づけ、宣旨を受けて諸侯に告げ、各国の宝を競わすとともに徴収して天子に奉るのです。これなら天子を尊ぶとともに会盟が秦にとつて私的なものでないと天下に広言できるでしょう」

そこで哀公は表文を公孫后に携えさせて周に派遣した。洛邑に着いた公孫后は表文を周の景王に奉つた。天下の諸侯から顧みられることなく、毎日の食事にも事欠く景王にとつてまさに干天の慈雨ともいふべき表文である。

「秦公がどのように周のことを思つてくれているとは……。秦公の後ろ盾があらばわが周も末永く安泰。どうして一通の詔書を惜しむことがあろう」

景王はすぐさま詔書を書くとともに白旆（大将が指揮をするのに用いる旗、黄鉞（天子が征伐に出かける時に用いたまさかり）、宝剣、金牌を使者に携えさせ、公孫后とともに秦に赴かせた。哀公は咸陽まで出迎え、詔書を謹んで受けた。）

（龍が池に潜んでいればその上空には雲が集まるといい、また、虎が崖で蹲つていればその辺りに風が渦巻くという。考えるに、国家が苦難の状態になった今、令は行きとどかず、朝貢は納められない。しかしどうしようもなく、毎日嘆いてばかりいた。しかるに、この世の龍か虎かと評される秦侯が表文を奏し、周を尊ぶ志を示した。まことに立派な志と賞賛すべきものである。そこで使者に託して宝剣一振り、金牌一面、ならびに白旆と黄鉞を与える。これをもつて秦公が会盟の盟主となることを認証する。会盟が成功した暁には重い恩賞を与えようぞ。詔書の届いたその時、謹んで事を行え）

哀公は北を望み、恩を謝し、使者を厚くもてなしたのち帰らせた。その後に公孫后を呼び尋ねる。「このように詔は手に入れた。さて、どこでこの会盟を行うべきだろう」

「関中で適所は驪邑のほかありません。土地は広く平らです。ここに会場を設置し、軍を金斧山の麓に伏せておきましよう。さあ、列国に使者を出し、三月一日に開催することを知らせましよう。

もし、来ないようなら天子の詔書を大義として征伐に出るのです」

使者が中国全土に散っていった。

楚にも秦からの使者が着く。書簡を読み終わった霊王は難しい顔でフウッと大息をついた。ひとまず使者を宿舎にいられたのち、群臣を集めた。

「秦公がこのような会を設けた真意は一体なんだろう」

すぐさま大夫の伍奢が進み出る。

「今回の会を秦が設けたのは、鬪宝をして、天子に奉るのは名目だけ。実は天子の名を借りて諸侯を一堂に集めて覇業を為そうとの意にほかなりません」

「どうしてそのように見てとる」

「天下の形勢を考えてください。秦は潼関の西に広大な領地を有し、兵力は百万を下りません。常に諸国を併呑せんと虎視眈々と狙っています。しかし、晋と楚が協力をすることだけが秦にとつて恐ろしいのです。そのために諸侯を関中に引き入れ、伏せておいた兵で威圧し、いうことを聞けば国に帰し、従わなかったら斬り殺すつもりに相違ありません。そのところを考えずに会に出ることとは、羊を虎の口先に置くのと同じ危険なことといわねばなりません」

「それでは、参加するのをやめようか……」

「楚は天下に覇を唱えようとする強国ですぞ。もし、今回の鬪宝の会に出席しなかったら、秦を恐れれたことにもなりましょう。出席しなければなりませんまい。文武に優れた士を連れて安全のうえにも安全を期すことです」

「それまでしても出なければならぬか……」

「出なければなりません。さすれば秦を恐れていないことを天下にあまねく知らしめることになりません。しかるのちに秦を滅ぼす策を練るべきでしょう」

「うむ」

霊王は唇をキリリと締め、一座の群臣にいう。

「だれかワシをよく守り、今回の危機を乗り切ることのできる者はいないか」

しかしながら豪傑、老臣たちのだれもが下を向いてモジモジするばかり、名乗り出る者がいないと、右の列から大声が上がった。

「そのお役目、この私にお任せあれ」

満座の者が声のほうを見た。身の丈八尺（約百八十センチ）、虎のように筋肉が盛り上がった背中、熊のごとく柔らかな腰の青年が顔を紅潮させて立ち上がっている。

「必ず王の安全を守ってお見せいたしましょう」

それは伍奢の子、伍子胥である。年いまだ二十に満たない者であった。けれども彼の文武に優れたことは楚では知らぬ者はない。また、古今のあらゆることにも精通していた。

霊王はなみなみならぬ決意をあらわにした顔、勢い込んだ大声に思わずにつこりとした。

「おおつ、伍子胥か。汝がいればなにを恐れることがあろう。しかしながら、わが楚は大国ではあるもののさして珍しい宝はない。なにを持っていけばよいのか……」

「私がお供いたします。宝などいるものですか。大王がご無事に楚へお帰りあることこそなにもにも代えられぬ宝であります。なにもご心配なさることはありません」

伍子胥の確信に満ちた言葉に霊王は喜んで、即日行列を整え数十の文武の大將を連れ、秦に向か

つた。

《玄象岡にて下荘が虎を撃つ》

数日して靈王は潼関に着いた。すでに晋の平王、斉の景王が待機していた。そこで揃って潼関に入ろうとした。

「なりません」

斉の大夫晏平仲が押し止める。

「秦は虎狼のような野蛮な国。すぐに入ればなにを企んでいるか知れたものではありません。諸侯が全員揃ってから一緒に入るべきです」

なるほどまっとうな意見である。三侯はこの意見に従って十日ほど陣を張って諸侯の揃うのを待った。やがてぞくぞくと諸侯が到着してきた。莒国の著王をしんがり十七侯が全員揃った。

「秦公は天子の宣旨を賜ってわれらを集め、鬪宝をしようとしている。その期日は三月一日、もはや日にちが迫っている。さあ、全員が揃って潼関に入ろう」

諸侯が出発の準備にかかった。ところが呉の公子姬光だけは両眼に涙を浮かべて馬に乗ろうとしない。怪しんだ靈王がわけを尋ねてみた。

「私は父王の代理として珊瑚の枕をわが国からの宝として持参し、今回の会に出向してきました。ところが玄象岡の麓にて盗賊展雄に奪い取られてしまったのです。ですから宝枕はもはや手元にあ

りません。どの面さげて会に臨めましょうや……」

こう聞いても靈王にはどうしてやることもできない。黙ってはらはらと涙を流す姫光を眺めているだけだった。その時、すでに出発していた隊列の先頭から早馬が靈王のもとに届いた。

「玄象岡の麓に展雄と名乗る盗賊がいて、路を遮り、十七国の宝をすべてよこせと凄んでいます。こいつがなかなか強く、前進できません」

「われらは中国の諸侯ではないか。たかが盗賊ごときに侮られ、路を進むことができぬとは……」
靈王は怒り、自ら着ていた真つ赤な絹の戦衣を脱ぐと高々と掲げた。

「列国の勇士たちよ、展雄を虜にしてくる者はいないのか。真の勇者がいるなら、この戦衣を賜ろうぞ」

その言葉が終わらないうちに列から斉国の公子姜鐸が進み出た。

「私がいきましょう」

諸侯は大変喜んで姜鐸に酒を三杯与える。ググイッと姜鐸は一気に飲み干すと馬を飛ばして出ていった。結果やいかに、と諸侯が固唾を飲んで待っているところへ早馬が帰ってきた。

「姜鐸は逆に展雄によつて捕らえられてしまいました」

一座の者たちに落胆と恐怖が走った。靈王が再びいう。

「だれかいなか」

鄭国の軍団から身の丈九尺（約二メートル）の大男がすつくと立ち上がった。

「私にお任せあれ」

それは下荘であった。諸侯は下荘に再び酒を三杯与え、陣から送り出した。鄭の簡公は下荘が失

敗することを恐れ、管堅かんじけんに兵をつけて、補佐させることとした。一行が三里（一・二キロ）も進んだらうか、あたりに耳を聳こたするがごとき咆哮が響いた。

「前方で二匹の虎が争っています。そのため、進軍できません」

「虎ごときに進軍を阻まれて、なんぞ勇士といえよう」

下荘は怒って虎を退治に歩み出そうとする。

「なりません。二虎が争っているのです。必ず一匹の虎が敗れて、残りの虎は疲れ果ててしまうでしょう。どうしてその時を待たないのですか」

気負い込む下荘は管堅の言葉に従いながらも、なおギリギリと歯を鳴らし立ち続けていた。やがて二匹の虎は疲れたのだろうか、戦いを止めて地に蹲る。満を持していた下荘は二匹の間に駆け込むと神業のごとく二匹の虎を交互に拳で殴りつけまたたく間に殺してしまった。一体どうなるのかと固唾を飲んで見守っていた兵たちが一斉にどよめき、鬨なげの声を上げる。

やがて一行は玄象岡の麓に着いた。そこにはすでに展雄が数千人の盗賊どもを引き連れて待ちかまえている。

「そこに来るのはだれだ。すぐに宝物を差し出すほうが身のためだぞ……」

「盗賊ふぜいが大きな口をたたくな。われこそは鄭の下荘なるぞ。さきほど虎を二匹血祭りにあげてきたばかりだ。おとなしく奪った珊瑚の枕を返せば命は助けてやろう」

その言葉が終わらないうちに展雄は駆け出し、下荘にかかつていく。二人は激しく闘った。やがて展雄は偽りに逃げ出す。下荘が後を追う。と、突然展雄が振り向きざま九節の銅鞭を横殴りに払った。追いかけることだけに集中し、守備を忘れていた下荘はこの攻撃を避けることができず、血

を吐いて落馬した。止めを刺しに展雄が駆け寄ったが、一瞬早く管堅が兵とともに駆け寄って救出したのである。

《秋胡しゅうこが盗賊に罵られる》

口から血を吐き、無残な姿で帰ってきた下荘に諸侯は恐れおののくばかりでこれといった策もなく、ただコソコソとざわめくばかり。靈王は苛立いらだった。

「ええい、十七もの諸国から人材、豪傑がこれほど集まっているがただ一人の盗賊ごときに手も足も出ないとは……。展雄を破る者があらば珊瑚の枕を恩賞おんしょうとしよう」

けれども座中から応じようとする者はいない。と、陳国の大夫秋胡しゅうこが進み出た。
「武で駄目なようです。私が三寸不爛さんすんふらんの舌でもつてきやつを説き伏せてきましよう」

靈王は喜び、すぐさま秋胡に馬車を与え、出発させた。やがて秋胡は展雄の塞に到着する。

「やいやい、おれさまに断りもなく塞に入ってくるのはだれだ」

「諸侯に代わって將軍との講和を成すために来た」

「ふん、どうせろくでもない話だろう。まあいい、ちよと暇を持て余していたところだ。聞いてやろう」

「仁者は純粹であることをもって徳とし、義者は自制することがよいといわれている。さて、今、將軍はこのような山奥の塞に身を置きながらも、そのお名前は全国に知られています。ましてや、

今回十七の諸侯を恐れさせ、選抜の豪傑を打ち破りました。そこで、仁義の心を示され、宝物をお返しになり、路を開いて諸侯を迎えられるならば、会盟において將軍のお名前は義者として語られ、やがては天子のお耳にも伝えられることでしょう。そうして取り立てられ、その功は歴史に残るに違いありません。ただの盗賊として終わるのか、それとも功臣として後世まで名を残すかの分かれ目ですぞ。よくよくお考えのほどを……」

聞いていて展雄はだんだんと腹が立つてきた。天子だの仁義だの、別の世界の論理を並べられ、馬鹿にされたような気持ちにもなるのである。

「やかましいわ。ワシはこう聞いている。仁者はしよせん貧乏たれで、富む者には仁なんてものがない、と。このような春秋の乱世に力を頼りに生きなければまつとうな暮らしができるはずがない。そのような言葉に騙されるワシではないわ。本来、すぐさま斬つて捨てるころなれど、そうそうに立ち去れ。ならば命ばかりは許してやろう」

一喝されて秋胡は頭を抱え、鼠が逃げるごとく退散した。コソコソと帰つてきた秋胡を見て、諸侯は報告を聞くまでもなく説得が不成功に終わったのがわかった。

「もはや、どうすることもできない。前進ができない以上、国に帰ろうか……」

この時、伍子胥が進み出ている。

「これだけのお歴々がおいでになるのに、たった一人の盗賊を恐れ、宝を抱いて逃げ帰ろうとしている。なんと情けないことか……。私が行つて成敗してきましよう。皆様はこの場で鼓を打ち、鬨の声を上げ、氣勢を示してください。もし、私が成敗できなかった場合にはこの首を斬つていただいても結構です」

力強い宣言が自分の配下から述べられたのに大喜びの靈王は絹の戦衣を伍子胥に与えようとした。「まだ展雄を征伐していません。この賜物は受けることはできません。しばらくここに掛けておきましょう。奴を討ち取った後にいただきます」

伍子胥は出ていった。残つた諸侯は鼓や鬨の声で氣勢をどつと上げる。

さて、展雄はただ一騎向かつてくる伍子胥に自らも塞から一騎で鎗を横たえ迎え討つ。二人は無言のまま馬を交えた。三十合（「合」とは両者の剣を交わした回数を表す）も互角の闘いが繰り広げられた。

やがて展雄の矛先が鈍りだす。はじめのうち伍子胥は展雄をこの場で斬り殺そうと思っていたが、戦ううちに彼の人物や武芸が惜しくなってきた。衆人の前で打ち破り恥をかかせるべきでないと思ひ直した。そこで偽りに逃げ出し、山陰に誘い込んだ。そうとは知らぬ展雄は勢いに乗って追いかける。頃合いをみて伍子胥は振り向きざま鎗を繰り出した。ふいをつかれた展雄は髪を突かれ落馬したのであった。

馬上から不様に倒れている展雄に向かって伍子胥はいう。

「汝は只者ではなからう。なのに、功を立てて名を残すことを志さず、盗賊稼業ごとき卑しい生活に身を置くとはもつたない。本来ならすぐさま首を取り、諸侯の恨みを晴らすべきなれど許してやろう。すぐさま罪を悔い、宝物を返し、姜鐸を解放せよ。そうして、別の人生を送れ」

展雄は涙とともに珊瑚の枕と姜鐸を送り返した。

靈王は大喜びで珊瑚の枕は姫光に返す。また、伍子胥には絹の戦衣を与えた。